

## 序章 あっけない幕切れ——三七年に及ぶ支配——

独裁者からの独立／独裁者の顔／「マンデラよりも英雄」

7

## 第一章 差別と独立——ムガベとの接触——

「独裁者」とのインタビュー／ムガベの生い立ち／植民地だった母国／  
勉強漬けと最初の妻／独立闘争／一〇代の少女も独立闘争へ／「石の家」独立へ

23

## 第二章 アフリカの優等生——融和と略奪——

人種間の団結求める／ムガベの遺産、教育／権力争いと暴力／  
「ムガベは独裁者」／ンコモの願い／弾圧激しさ増す／野党党首も暴行被害／  
ジャーナリストへの弾圧

53

## 第三章 経済崩壊——一五年続く就職氷河期——

お土産は「一〇兆」紙幣／賞味期限切れの品で食いつなぐ／銀行に長蛇の列／

85

## 第四章

### 土地は誰のものか——白人との対立——

過去の清算／アフリカのパンかご／破壊された農地／

「土地改革は権力維持のため」／ザンビアに渡った白人農家／

「黒人は、土地をもらう権利がある」／中国人に頼るタバコ栽培／

「我々の土地を取り戻したただけだ」／白人農家への「補償」

## 第五章

### 妻への愛が身を滅ぼす——軍との対立——

容疑者は大統領夫人／不倫から正妻へ／妻の浪費癖と国民の支持離れ／

アイスクリームで毒殺狙う？／ブーイングは「国軍からの指示」／

行動を起こした国軍／日本人は友達？／交渉の舞台裏／「グレースは悪魔」

## 第六章 期待と失望——ムガベなき選挙——

外資を呼び込め／選挙グッズが人気／投票日前日、ムガベが動く／  
妻のレースに直撃／主役は自分／銃声が響く首都／報道陣との軋轢

177

## 第七章 ムガベ待望論——根強い人気——

ムガベ辞任から一年／野党党首に聞くムガベ評／夜行バスで買い物／  
「世界一高いガソリン代」／軍事化が鮮明に／ムガベの死

205

## 終章 マンデラとムガベ——英雄と独裁者——

マンデラ生誕一〇〇年／マンデラの功績／「虹の国」と貧富の格差／  
「戦場に近い」犯罪国／ムガベの豹変

229

## 参考文献

253

## 序章

# あっけない幕切れ

——三七年に及ぶ支配



ムガベが大統領の辞任表明をした後、  
首都ハラレ中心部で喜びを爆発させる若者たち=2017年11月21日

## 独裁者からの独立

アフリカの人々が、心の底から喜んでいる瞬間を目の当たりにしたのは、あの日が初めてだった。他人の車のボンネットによじ登って伝統楽器のブゼラを吹き鳴らし、瓶ビールで祝杯をあげている。歓喜の歌や踊りをして涙ぐみ、誰彼かまわずハイタッチをする。果てには、道路の真ん中で腕立て伏せをする男性までいた。

二〇一七年一月二一日夕。現役的首脳として世界最高齢の九三歳だったジンバブエの大統領、ロバート・ムガベが、国軍による事実上のクーデターをきっかけに辞任を表明した。独立から三七年にわたって権力の座にとどまり、時に独裁者として批判されてきた男のあつけない退場劇だった。

ニュース速報やインターネットのSNSで辞任を聞きつけた人々は、首都ハラレの大通りを埋め尽くした。私はそのど真ん中で、一眼レフカメラと記者証を首からかけ、高揚する人々に話を聞いていった。友人と踊っていたアインシュタイン・ゴンゾ（三五）は叫んだ。



大統領だったムガベを自宅軟禁状態に置いた軍を称え、首都ハラレ中心部にいた兵士と写真を撮る市民ら＝2017年11月19日



ムガベが大統領の辞任表明をした後、首都ハラレ中心部で喜びを爆発させる若者たち＝2017年11月21日

「本当に幸せて最高だ。私たち国民は、独裁者が支配する政治にずっと我慢してきた」。最初は、治安当局に目をつけられることを恐れて自分の名前や年齢を私に教えることを躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>していたが、すぐに思い直した。「今日は独立記念日だ。写真を撮って、新しいジンバブエを世界中に報道してくれ」。

ゴンゾは大学を卒業後も、仕事が見つかっていない。友人もほとんどが無職だ。「長らく不景気で若者に職はない。生活はずっと苦しいままだ。新政権で経済が良くなって欲しい」と願った。

法律事務所で働くジョセファート・シトーレ（四五）は「これまでは、ムガベ政権を批判することすらできなかった。それが今日で終わった。人生で一番幸せだ」と喜んだ。物価上昇もあって三人の子どもを養うので精いっぱいだと話し、「今こそ国民が団結して、国を立て直す時だ」と訴えた。

群衆は、ムガベの顔写真に斜線をつけた写真を掲げた。「独裁者」を辞任に追い込んだ国軍の兵士を見かけると、握手や記念写真の撮影をせがんだ。「記念日だから」と言って、日本人記者の私と写真を撮りたがる人も少なくなかった。



首都ハラレで開かれたムガベの大統領辞任を求める大規模集会に参加し、  
プラカードを掲げる男性ら＝2017年11月18日



私は笑みを浮かべる若者を捉えた写真を次の日の夕刊用に出稿した。見出しは「『やつと自由に』笑顔の街」とつけられた。

地元ニュースは、辞任直前のムガベの様子を何度も映していた。その姿からは、四年前に私がインタビューした時に感じた威圧感はなくなっていた。

### 独裁者の顔

たった一人の指導者の辞任に、人々が歓喜乱舞するのも無理はない。ムガベがこの国のリーダーになったのは、イギリスや白人政権の植民地支配から独立を果たした一九八〇年。全人口約一六〇〇万人のうち、約八割を占める三〇代以下の若者にとって、リーダーが代わる経験は初めてのことだ。

五〇カ国以上もあるアフリカ大陸で、ムガベほど長きにわたって権力を掌握し、さらには世界的にも注目を集めてきた指導者はほとんどいない。独立からわずか数年後、敵対する勢力を支持していた少数派民族のンデベレの制圧を指示し、二万人とも言われる人々を殺害した。クーデターを阻止し、権力基盤を固めるのが大きな狙いだった。

そうかと思ったら、一九九七年には、独立闘争とともに闘い、生活に困っていた元ゲリラ兵約七万人には、財源のめどもないまま、一人五〇万円相当の一時金と月三万円相当の年金を支給することを決めた。

一九九八年には、コンゴ民主共和国（DRC）の内戦に兵士一万人を派遣することを決定。四年にわたって四億ドル以上が使われ、国家財政を急速に悪化させた。国境を接してもない国に兵士を派遣した理由について、「ムガベの妻のために買ったダイヤモンドの鉱山を守るためだった」とうわさされた。当時、コンゴに派遣された元兵士は「ムガベの指示なら、戦うしか選択肢はなかった。ただ、自分たちの敵が誰なのか、何のために戦っていたのか、最後まで分からなかった」と振り返った。

これだけではない。二〇〇〇年代に入ると、ムガベは、元ゲリラ兵たちが白人農家の農地に居座って白人を脅し、追い出すことを容認した。奪った農地は、農業の知識や経験が乏しかった元ゲリラ兵や側近に優先的に分配されていた。

白人が多くの土地を占めていたジンバブエで、ムガベの土地改革は黒人の貧困層を中心に支持された。だが、食糧の生産量は一気に低下し、国連の世界食糧計画（WFP）の統

計では、二〇〇〇年に八億五〇〇〇万ドルあった農産品輸出は、六年後には半分以下に減った。

野党の政治家や支持者が治安部隊によって襲撃され、それを報じるメディアへの弾圧も相次いだ。欧米諸国から経済制裁を受け、国の経済は崩壊。失業率は最大で九〇%まで上がり、二〇〇八年には一時、二億三〇〇〇万%を超えるハイパーインフレに見舞われた。紙幣が紙くず同然に価値を失い、生活苦から全人口の四分の一に及ぶ約三〇〇万人が国外に逃れたと言われている。

普通の国なら、こんな事態に陥れば指導者が責任を取り、政権交代が起きる。だが、ムガベは違った。

「この狂気の物価上昇はイギリスの陰謀だ」と、他国のせいにしたのだ。同じ年に国内でコレラが流行し、約二万六〇〇〇人が感染、一五〇〇人以上が死亡した時も、イギリスにその原因を負わせようとした。

政治家が、自分の失政を他国や他人のせいにするのは、アフリカ以外でも見られる現象だ。ただ、国民の大多数が日々の生活にも苦しむ中で、ムガベやその妻は海外で高額な不

動産やブランド品を買いあさり、優雅な暮らしを続けた。欧米諸国から見ると受け入れられない発言も多く、「同性愛者は犬や豚よりもひどい」といった暴言もあった。

独立時に英雄と称されたムガベは、いつしか、国民や欧米諸国から「独裁者」と批判されるようになった。不倫の末にムガベと結婚した四一歳年下の妻のグレースにいたっては、高級ブランド品の名前を取って、「グッチ・グレース」との悪名がついた。

二〇〇三年に開かれた閣僚の葬式で、ムガベは欧米諸国を挑発するように叫んだ。「私は今もヒトラーだ。ヒトラーである私の唯一の目的は、国民のための正義、主権、独立、そして、資源への権利だ。もしそれらがヒトラーなのだとしたら、その一〇倍のヒトラーにさせてくれ。一〇倍だ」。

二〇一〇年、アメリカの外交専門誌「フォーリン・ポリシー」は、世界の独裁者二人のランキングをまとめた。ムガベは、北朝鮮の金正日キムジョンイル総書記に続いて二位に選ばれた。この雑誌は、ムガベを「殺人的な暴君」と表現し、「反対勢力を拘束・拷問するなどした」と非難した。

その三年後、私と同僚によるインタビューでは「ヨーロッパやアメリカの人間が私のこ

とを独裁者と言うのは、白人の土地を私たちが取り戻したからだろう。だが、土地の接収政策は彼らの同意を得たし、補償もイギリス政府が約束していた」と、欧米の責任を何度も訴えた。独裁者と呼ばれる筋合いはないということだ。

### 「マンデラよりも英雄」

私はムガベが辞任した当初、国民の大半が歓喜していると考えていた。地元メディアはもちろん、欧米メディアの報道や市販されている本を読んでも、三七年にわたって権力の座にしがみついていた独裁者がようやく辞め、国民は歓迎しているとの内容が目立った。

ムガベが辞任を発表した時、イギリスのメイ首相は「抑圧という（ムガベの）統治の特徴だったものがなくなり、ジンバブエに新しい道を築く機会を与える」との声明を発表。

アメリカ政府も「ジンバブエにとって歴史的な瞬間を刻んだ。変化の時だと平和的に声をあげた全てのジンバブエ人を祝福する」と歓迎して見せた。

ところが、辞任から二年近くにわたり、与野党の政治家から元軍人、経営者、大学教授、一般市民まで、一〇〇人以上に話を聞くうち、「辞めてもなお、ムガベは英雄だ」と答え

るジンバブエ人が多いことに気づいた。

そのうちの一人、ステンリー・ムビリミ（三四）は母国を経済危機が襲っていた二〇〇八年に故郷を離れ、今は隣国の南アフリカのミッドランドという場所に住んでいる。

ムガベが大統領を辞任した時は、「経済や雇用が良くなるかもしれない」と期待し、喜んだ。ただ、指導者として国を率いてきたムガベへの感謝は、今も変わらない。

「ムガベは確かに長く権力の座にとどまりすぎた。経済危機も招いた。でも、その責任は、他の側近にもあるはずだ。彼は私たち黒人のことを第一に考えてくれた。白人と仲良くした南アフリカのネルソン・マンデラは、世界的には英雄として称賛されているかもしれない。でも、私にとっては、ムガベのほうが尊敬できる英雄だ」

ムビリミは、高校生の時に父親を亡くし、農家の母親が大学まで通わせてくれた。だが、卒業した二〇〇六年、国の経済は破綻に向かい、正規の仕事は見つからなかった。朝六時から夕方まで、両替商の仕事をし、日銭を稼いだ。

二年後、兄弟を頼って、最低限の服を持って夜行バスに乗り、南アフリカに渡った。ガソリンスタンドの店員、コールセンターの電話番号、医療道具の販売員などの仕事を転々と

した。二〇一五年に結婚し、子どもも生まれ、今は教育系の会社でマーケティング業務を任されている。

ムビリミと同じ意見を持つ南アフリカ人にも出会った。フリーで音楽活動をしているフロイド・ケカナ（三四）は「マンデラは白人と手打ちして、白人に国を売った。大多数の黒人は土地も持てず、今も貧困にあえいでいる」と批判した。

「マンデラとムガベ、どちらが英雄でしょうか？」と尋ねると、「そんなの疑いようがない。ムガベだ。白人から土地を奪い返し、白人支配を打破したのだから。彼こそが真のアフリカ人だ」と言った。

彼らの考えは、私にとって、頭を鈍器で殴られたような衝撃だった。

日本や欧米諸国に住む大多数の人にとって、約二七年にわたって収監されながら、アパルトヘイト（人種隔離）政策の廃止や白人との融和を進めたマンデラこそ、世界的な英雄だろう。一方、隣国のジンバブエにいたムガベは、「独裁者」としての印象が、そもそも、その存在すら知られていない。

ただ、この二人の歩んできた道のりは驚くほど似ている。ともに黒人差別を続けた白人



南アフリカのヨハネスブルク郊外にある商業施設では、元大統領のネルソン・マンデラの像が立つ＝2018年7月22日



政權に反発して政治運動に参加し、獄中生活を経験。ムガベは国を独立に導き、マンデラはアパルトヘイト政策を廃止に導いた。

では、どこで世界的評価に差がついたのか。その答えの一つは、欧米諸国にけんかを売ったかどうかだろう。白人が支配していた土地を強制的に接収し、黒人に分配したムガベは、欧米側から見れば「土地を奪った」敵以外の何者でもない。

ムガベの四〇年来の友人である神父のフィデリス・ムコノリ（七〇）は「ムガベは西側諸国にとって、ダーリン（最愛の人）ではなかった。常に過激主義者とか共産主義者としてテルを貼られた」と語る。当時のアメリカとソ連を中心とした冷戦下で、いったんできあがったイメージを覆すのは難しい。ムコノリは「独裁者というイメージは、ジンバブエ人によってつくられたものではない。よそ者によってつくり上げられたものだ」と言う。

二〇一九年九月六日、ジンバブエ政府は、ムガベが入院先のシンガポールで死去したと発表した。九五歳。独立闘争や経済制裁、ハイパーインフレなど、激動の時代とともに歩んだ権力者は、家族に看取られてひっそりと亡くなった。

ムガベの後任として大統領に就いたエマソン・ムナシガグワ（七六）は「国民の英雄」

「解放の象徴」とムガベをたたえ、「私たちの国家とアフリカ大陸の歴史において、彼の貢献は、決して忘れられることはない」と悼んだ。

だが、死去を報じた日本メディアの中には、ムガベについて「世界最悪の独裁者」と表現する記事もあった。欧米諸国との関係が深い日本では、ムガベの評価はどうしても欧米よりに傾いてしまう。彼が素晴らしい指導者だったと評価する気持ちはない。ただ、「英雄」と「独裁者」の両方の顔を持つ男は、ひょっとしたら、マンデラのように世界的に称賛される素質があったのかもしれない。

イギリスの歴史家ジョン・アクトンが「権力は腐敗する」と述べたように、長く権力を持てば、何らかのひずみは出てくる。核兵器の開発やミサイルの発射を続ける北朝鮮は言うまでもなく、日本のような国でもそれは避けられないように思う。

絶対的だったはずの権力者は、なぜ堕ちたのか？

なぜ辞め時を間違えたのか？

彼の足跡を辿りながら、ムガベの光と影を探ってみることにした。

